

小児の胸部撮影の注意点

1 検査室内での落下等による怪我の防止

- 撮影室内は、接触事故等を防ぐため、不必要なものは設置しておかない。
- 入退室時の撮影室のドアの開閉は、手足などを挟む恐れがあるため技師が行う。
- 入室から退室まで常に技師一人が付き添い、患児から目を離さない。
- 特に乳児などの受け渡しは落下の危険性を伴うので、手渡しでの授受は行わずベッド又はマット上などで行う。
- 撮影は複数の技師で行うのが望ましいが、少なくとも、介助者を含めて2人で行う。患児を固定する際は、お互いに声をかけ合いながら行う。
- 撮影時は子供が興味を引く視覚固定具（ビデオ等）を用いるのも有効である。
- 体動が静止している間に撮影を行う。
- 撮影後、患児の保護者あるいは付添い者への引き渡しの際も入室時と同様に行う。

2 固定具による怪我

- 固定具を使う場合、身体が挟まれたり、角などで怪我をする事が考えられるため、固定具の一部加工（角を削る、スポンジを貼る）などの工夫が必要となる。
- 固定具を使用する際、患児と固定具の干渉接触に注意を払う。

入室から退室までの流れ

1 患児入室前チェック

- 患者名、年齢、性別、オーダーを確認する。
- 撮影条件の設定
- カセット、照射野、左右マークを準備（必要であれば補助具も準備）

2 患児入室

- 患児をフルネームで呼ぶ。
- 患児確認のため、保護者あるいは付添い者に名前を言ってもらう。
- 検査の内容、撮影枚数、撮影予定時間を説明する。
- 上半身の衣服を脱いでもらう。または保護者あるいは付添い者に脱がせてもらう。
- 患児を預かる。

注意! 入室してから退室するまで、必ず一人の技師は患児から目を離さない。

3 撮影

- 体動等により、患児を固定する場合、頭、手、骨盤等を押さえる。
- 撮影部位が照射野内に収まっている事を確認し、呼吸のタイミングに合わせて撮影を行う。その際、患児を固定する術者の手などが、照射野内に入らないように注意する。

注意! スイッチを押す技師、患児を固定する技師など役割分担を行う。複数の技師による撮影が望ましいが、少なくとも、介助者を含めて2人で行う。

4 画像確認

- 撮影部位が適正に描出されている。
- 撮影部位が指示と合っているか、左右マークが合っているか。

5 患児退出

- 退出の際、忘れ物が無いか確認をする。

6 フィルムをお渡しする場合

- 患者名、オーダー内容など画像を再度確認してからお渡しする。